

タイトル	Psychiatric day treatment specific for young individuals with early psychosis: A possible contribution to improve their functional outcomes
別タイトル	早期精神病の若年者に特化した精神科デイ・トリートメント:機能的転帰の改善に寄与する可能性
作成者(著者)	舩渡川 智之
公開者	東邦大学
発行日	2021.04.15
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨. 7.
資料種別	学位論文
内容記述	主査: 桂川修一 / タイトル: Psychiatric day treatment specific for young individuals with early psychosis: A possible contribution to improve their functional outcomes / 著者: Tomoyuki Funatogawa, Takahiro Nemoto, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Masafumi Mizuno / 掲載誌: Toho Journal of Medicine / 巻号・発行年等: 6(4): 164-171, 2020 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661乙第2944号
学位記番号	乙第2783号
学位授与年月日	2021.04.15
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD75467404

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

船渡川智之より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号乙第 2783 号

学位申請者 : ふな と がわ とも ゆき
船 渡 川 智 之

学位論文 : Psychiatric day treatment specific for young individuals with early psychosis: A possible contribution to improve their functional outcomes

(早期精神病の若年者に特化した精神科デイ・トリートメント : 機能的転帰の改善に寄与する可能性)

著 者 : Tomoyuki Funatogawa, Takahiro Nemoto, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Masafumi Mizuno

公表誌 : Toho Journal of Medicine 6(4): 164-171, 2020

論文内容の要旨 :

近年、初回エピソード精神病 (first-episode psychosis [FEP])、精神病発症危険状態 (at-risk mental state for psychosis [ARMS]) といった精神病の早期段階での治療的介入の重要性が世界各国で報告され、中でも心理社会的治療の重要性が強調されている。しかし、精神科デイ・トリートメントの治療効果を検討した研究は少ない。本研究は、早期精神病を有する若年者への包括的な心理社会的治療である精神科デイ・トリートメントの治療効果を検討することを目的として実施した。

本研究は、2011年1月1日～2014年3月31日東邦大学医療センター大森病院精神神経科の精神科デイ・トリートメント「イル・ボスコ」に定期的に参加する早期精神病患者を対象とした。被験者には、治療開始時点と12ヵ月後時点でそれぞれ認知機能 (the Letter Cancellation Test、the Serial Seven-word Learning Test、the Modified Stroop Test [color and form]、the Wisconsin Card Sorting Test、the Trail-Making Test、the Digit Span)、精神症状 (the Positive and Negative Syndrome Scale [PANSS])、社会機能 (Social Functioning Scale)、生活の質 (the World Health Organization's Quality of Life 26 [WHO QOL 26]、the Subjective Well-being under Neuroleptic Drug Treatment Short Form, Japanese version)、全般的機能 (Global Assessment of Functioning [GAF])、抗精神病薬の処方量を測定した。統計解析には SPSS 23.0 版を用い、治療開始時点から12ヵ月後時点までの臨床的変数の変化について、対応のある t 検定または Wilcoxon の符号順位検定を適宜用い、

「イル・ボスコ」の治療回数と臨床的変数の変化量(Δ : 12ヶ月時の値からベースライン値を差し引いた値)との関連、及びこれらの臨床的変数の変化量と抗精神病薬の処方量との関連については、Spearmanの順位相関係数を分析した。ARMS患者のうち、精神病を発症した患者と非発症患者との間で、治療開始時点の臨床的変数と治療頻度の違いを調べるために、対応のないt検定またはMann-WhitneyのU検定を適宜用いた。各々有意水準は $p < .05$ とした。

調査期間内に81名(FEP 59名、ARMS 22名)の患者が登録され、平均年齢は21.9歳(SD=3.8)であった。治療開始時点のPANSS合計得点の平均値は79.4(SD = 17.8)、GAF値の平均値は46.5(SD = 8.0)であった。11名の被験者(13.6%)がプログラムから脱落したが、1年間のプログラムを終了した患者との間には、人口統計学的情報及び臨床的変数に有意な差は認められなかった。次に、1年間のプログラムを終了した70名(86.4%)の患者(FEP 50名、ARMS 20名)のデータを解析し、プログラムの治療効果を検討した。治療開始12か月後時点では、治療開始時点と比較して、認知機能、精神症状、社会機能、生活の質、全般的機能などの各領域において有意な改善が認められた。1年間のプログラムを終了した被験者の治療回数の平均値は68.2回(SD=54.7)であり、治療頻度と以下の臨床的変数との間に有意な相関が観察され、それぞれ Δ Digit Span 順唱桁数($r = .318, p = .049$)、 Δ PANSS 合計得点($r = -.309, p = .009$)、 Δ PANSS 陽性尺度得点($r = -.238, p = .047$)、 Δ PANSS 陰性尺度得点($r = -.367, p = .002$)、 Δ PANSS 総合精神病理尺度得点($r = -.300, p = .012$)、 Δ WHOQOL 26 平均得点($r = .330, p = .038$)、 Δ GAF 値($r = .401, p = .001$)であった。そして、これらの臨床的変数の変化量と抗精神病薬の処方量との間には相関関係は認められなかった。また、1年間のプログラムの終了時点でARMS患者3名(15.0%)が精神病を発症したが、非発症患者との間には、治療開始時点のGAF 値($p = .848$)、PANSS 合計得点($p = .337$)、治療頻度($p = .258$)ともに有意差は認められなかった。

本研究の結果、早期精神病の若年者を対象に12ヶ月間の精神科デイ・トリートメントを行うことにより、記憶力、精神症状、生活の質、全般的機能の改善につながる可能性、及びこれらの改善がその治療頻度と関連する可能性が示された。

1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号乙第 2783 号	氏 名	船 渡 川 智 之
学位審査担当者	主 査	桂 川 修 一
	副 査	西 脇 祐 司
	副 査	端 詰 勝 敬
	副 査	狩 野 修
	副 査	廣 井 直 樹

学位論文の審査結果の要旨 :

初回エピソード精神病 (first-episode psychosis : FEP)、精神病発症危険状態 (at-risk mental state for psychosis : ARMS) といった精神病の早期段階での治療的介入の重要性が世界各国で報告され、中でも心理社会的治療の重要性が強調されている。しかし、精神科デイ・トリートメント (デイ・ケア) の治療効果を検討した研究は少ない。本研究は早期精神病を有する若年者への包括的な心理社会的治療である精神科デイ・ケアの治療効果を検討することを目的として実施した。

対象と方法では、2011年1月1日～2014年3月31日東邦大学医療センター大森病院精神神経科の精神科デイ・ケア「イル・ボスコ」に定期的に参加する早期精神病患者を対象とした。被験者には、治療開始時点と12ヵ月後時点でそれぞれ認知機能 (注意力、記憶力、遂行機能)、精神症状、社会機能、生活の質、全般的機能の評価尺度を用いてその変化と抗精神病薬の処方量についても測定した。

結果は以下のとおりである。調査期間内に81名 (FEP 59名、ARMS 22名) の患者が登録され、平均年齢は21.9歳 (SD=3.8) であった。治療開始時点のPANSS 合計得点の平均値は79.4 (SD = 17.8)、GAF 値の平均値は46.5 (SD = 8.0) であった。11名の被験者 (13.6%) がプログラムから脱落した。次に、1年間のプログラムを終了した70名 (86.4%) の患者 (FEP 50名、ARMS 20名) のデータを解析し、プログラムの治療効果を検討した。治療開始12ヵ月後時点では、治療開始時点と比較して、認知機能、精神症状、社会機能、生活の質、全般的機能などの各領域において有意な改善が認められた。1年間のプログラムを終了した被験者の治療回数 (平均値は68.2回 (SD=54.7)) であり、治療頻度と臨床的変数との間に有意な相関が観察された内容は、それぞれ Δ Digit Span 順唱桁数、 Δ PANSS 合計得点、 Δ PANSS 陽性尺度得点、 Δ PANSS 陰性尺度得点、 Δ PANSS 総合精神病理尺度得点、 Δ WHO QOL 26 平均得点、 Δ GAF 値であった。これらの臨床的変数の変化量と抗精神病薬の処方量との間には相関関係は認められなかった。また、1年間のプログラムの終了時点で ARMS 患者3名 (15.0%) が精神病を発症したが、非発症患者との間には、治療開始時点のGAF 値、PANSS 合計得点、治療頻度ともに有意差は認められなかった。

考察として、GAF の有意な改善は社会的技能訓練による効果を推測し、陰性症状の改善は国際共同研究においても改善が示されていることから、包括的アプローチによる全般的機能改善の可能性を示唆するものと考えられること、QOL の改善は日常生活の改善によるもの、認知機能の改善は有酸素運動との関連を考察した。脱落例については、先行研究の報告と同様であり、対象者のうち3名が精神病を発症したが、プログラム参加頻度が不十分であったため発症予防に至らなかったと考察した。

学位審査会は2021年2月25日午後7時30分に西脇、狩野、廣井、桂川が参加して行われた。まず申請者より約20分間の研究報告があった後に質疑応答がなされた。質疑応答では、精神病未治療期間 (DUP) は薬物療法も心理社会的治療も含むものか、何を基準に予後を測っているか、通院の頻度は身体のリハビリテーションと同じ考えでよいか、デイケア介入しない場合の早期精神病患者の転帰はどのようであるか、治療ゴールをどこに設定するか、相関係数を用いて解析をした意味について、因果の逆転と考えられるか、研究協力の説明はどのようになされたかなどの質問がなされた。申請者はそれら全ての質問に適切に回答した。以上より、本研究は審査委員全員一致のもとで、学位に値するものと判断され、学位審査会を終了した。